

西郷隆盛と肥後の菊池氏



中山とし子

一、序章

西郷隆盛は、三十二歳の時、月照との入水騒ぎで蟄居を命ぜられ、大島（現奄美大島）に最初の配流の身となる。そして、そこで「菊池源吾」と改名する。これは、「吾の源は菊池なり」を意味するようだ。「菊池」とは、現熊本県北部、菊池市のあたり一帯のことを言い、一〇七二年、太宰府からここに下向した藤原氏一族が、南北朝時代を経て、室町期まで治めた土地である。西郷家の先祖が菊池氏に始まることを西郷は自覚しており、大島での変名に「菊池」を用いたと想像される。

「菊池源吾」には、祖先に対する西郷のプライドがあったとわかる。そこで、この小文では、西郷隆盛が誇りを持つ父祖の地としての菊池一族のことを明らかにし、わかりにくいと言われる西郷の実像の一端に迫りたい。

二、菊池市七城町砂田字宮ノ前西郷部落

「西郷」の地名は今も菊池市の加茂川村の一部落の名として残存している。

二〇一八年五月二十日、聖護寺護持会会長様のご案内によって、石碑の立つ菊池市七城町砂田字宮ノ前西郷の地を訪れた(写真1)。徳富蘇峰筆で「西郷南洲先生祖先発祥の地」と書かれている。この部落は、迫間川に臨んだ平野の中にあつて、十八外城の一つに数えられる増永城址があり、西郷太郎の墓と称する五段切の墳墓及び、古井戸やら濠(ほり)の跡などが現存している。(資料① p19)

同じ場所に立つ立看板(写真2)には、「こ

が大島に流され変名を余儀なくされた経緯を、簡単に述べておく。

の一带は菊池十八外城の一つ増永城址で、初代の城主西郷太郎政隆は、菊池氏初代則隆の子で菊池一族でした。その後、二十六代の西郷久兵衛昌隆の時、薩摩に移り住んだという記録があり、初代西郷太郎政隆から三十二代目が、西郷隆盛です」との文言がある。昭和二十七年十月の建立。

三、西郷の流罪から見えてくるもの

良く知られていることであるが、西郷隆盛



写真1 石碑と著者



写真2 西郷南洲先生祖先発祥の地の立看板

安政五年（1858年）七月、島津斉彬が五十歳という若さで急死したことにより、西郷隆盛は殉死を望むようになる。これを止めたのが、熱烈な尊攘派であった僧・月照（四十六歳）である。二人は將軍継嗣問題では共に一橋慶喜を推す間柄であったことから、幕府に命を狙われることになる（安政の大獄）。西郷は、恩人の月照をかくまうため薩摩に連れて行くこうと考えるが、ここでは、斉彬の異母弟、島津久光が、公武合体論を唱えていた。西郷らをかくまうて幕府に睨まれることを恐れた久光は、国境で月照を切り捨てるようひそかに指示を出す。もはや先がないことを覚悟した二人は、錦江湾に入水する。西郷吉之助三十二歳であった。

この後、西郷だけが助かるわけだが、自分だけが生き残ってしまったとの悔悟の念から、「自分は一度死んだ人間であり、この体

は自分のものであつて自分のものでない」との諦念に至ったことは考えられる。以後の人生は他のために生きる、との思いもあつたかもしれない。西郷には、時にわが命を投げ出すように相手の懐に飛び込んでゆく交渉のやり方が見られる。（例…1864年、第一次長州征伐の後の処理で、最後の抵抗をしていた長州藩士説得のため一人で下関に乗り込み、直談判をして要求を飲み込ませることに成功した）天に命を預けた人ならではの行動であろう。

その後、生き残った西郷のことが幕府に知られることを恐れた藩は、西郷が死んだことにし、墓を建て大島に蟄居させることにする。名前も変えるよう命令を受けた西郷は、「菊池源吾」と改名するわけである（他に大島三右衛門とも改名した）。菊池とは鹿児島ではあまりなじみのない苗字だが、最近まで、西

郷と菊池氏との関連に特に注目する書物は、寡聞にして知らなかった（資料③及び資料④に関連記事あり）。西郷は、島で結婚した愛加那との間にできた二人の子供たちにも、「菊次郎」「菊子」と菊を入れた名前をつけている。

資料③によると、西郷家の家紋は、「抱き菊の葉に菊」というもので、左右二枚の菊の葉が中央の十六枚の菊の花を抱いているように見えるデザインであったが、明治二年（1869年）に菊花紋章が皇室の公式紋章とされるに伴って、西郷家は、菊の葉三枚の紋に変えたようである。ちなみに、菊池氏の家紋は、「鷹羽紋」で、西郷家とは全く異なる。しかし、ネットの情報によると、菊池家にも菊を丸で囲んだ替紋が伝わるそうである。

四、菊池氏とはどのような氏族か

では西郷が誇りとする菊池一族とは、どの

ような人々であろうか。

実は、西郷家の家系図は、一六八八年に菊池西郷家二六代・久兵衛昌隆が島津氏に仕えてからとなっている。資料③によると、「久兵衛、某家ヨリ分立セシヤ其出ル処ヲ知ラス、只御記録書ニアル系図ヲ得テ記ス」との西郷の手写しと思われる註が添えられているが、資料④の20頁によると、二五代までは、肥後西郷家は細川氏に仕えたりしながら（一六三二年頃）、肥後にとどまっていたであろうことがわかつている。

伝わっている肥後西郷家系図が正しいなら、薩摩西郷家系図ときれいに繋がることから、薩摩西郷家が菊池氏を祖とすることは否定できない。これを、資料①の「藤原北家菊池系図」（p342）と、「第九 西郷家」

（p18・19）の中から更に検討する。

（一）、「藤原北家菊池系図」によれば、藤

原道隆から下ること四代目の則隆が肥後の国菊池郡に下向し（1072年）菊池則隆と称したのを菊池氏初代とする。その次男政隆は、西郷太郎と称し西郷家の先祖であろうとみられている。ところが、ややこしいことに、系図には次男の位置に記されているが、一説には、長男の位置に記されている経隆は三男であり、三男の位置にある保隆の弟であったという。そうなると、次男の位置に書かれている菊池政隆（西郷太郎）が長男ということになり、なぜ三男の経隆を長男として菊池家の跡取りにしたのかとの疑問が残る。しかし、地域によっては、末っ子を跡取りにする風習はあちこちに現代でも残っているし、親との相性や能力の差異によって跡取りを選ぶのは親の意志一つのところがあること。又、系図では三男に位置している保隆は、「小島次郎」と称し、その子・経保も「小島次郎」と称し

たので、実際は次男の可能性が高いこともこの説を裏付ける。

以上のような情報から、西郷太郎政隆は長男であった可能性があり、この人物は、菊池十八外城の一つ、増永城の初代城主となる。

この城のあったあたりが、西郷という地域であったために、西郷姓を名乗ったものである。ちなみに、ネットで引いてみると、「西郷…にしごう」という土地は出るものの、「西郷…さいごう」という地はヒットせず、ありふれた地名ではないことがわかる。

(二)、菊池氏十二代・寂阿入道武時の父は、西郷弥四郎隆盛と称した人だったが、ひるがえって、薩摩の西郷家九代目は、西郷吉兵衛隆盛。その長子も十代目吉之助隆盛と親子で隆盛を称したのは、武時公を追慕する思いがあったものか（資料①19頁）。西郷家は後醍醐天皇の忠臣、菊池氏の子孫である、と幼

いころより聞かされて育った西郷には、「勤皇」の意識が自然と育っていったのかもしれない。菊池氏は、十二代武時公と十三代武重公の時に大きく躍進した。この時代に、篤く佛教を信奉し、参禅に励み、後に述べる大智禅師の指導を仰いだという歴史がある（資料②）。

もつとも、西郷の父・吉兵衛と長男の吉之助が「隆盛」という同じ諱を持つのは、明治二年、西郷に辞令を出す際に、友人が誤って父の諱を答えたため、そのままになってしまったという経緯がある（資料③）。

(三)、十二代武時公は、建武の新政を成した後醍醐天皇の論旨に応じて戦ったが、一三三三年裏切りに遇い壮烈な戦死。その嫡男十三代武重公は肥後一国の守護を任じられ、尊王に命をかけた父の意志を継いで、後醍醐天皇の側近くに仕え各地を転戦。弟武敏と共に足

利勢に徹底抗戦した。次いで、十五代菊池武光公（武重の腹違いの弟）も、後醍醐天皇の皇子・懐良（かねなが）親王を擁護し戦ったという経緯から、菊池氏は代々朝廷を重んじる立場を貫いたと言える。ここが西郷の立場と通じるところである。あるいは、これを知っていた西郷が、先祖に倣って矜持を貫いた生き方をしたのだろうか。

(一)、(二)、(三)を総合的に検討すると、やはり西郷家は、肥後の菊池氏を祖とすると推定せざるを得ない。私は、この一族のDNAが少なからず西郷の中にもあったのではないかと、この仮説を持っている。先に述べたように、菊池氏は、徹頭徹尾尊王派であり、利益にならない戦いであるとわかっても筋を曲げず我が立場を貫いた（資料②）。この態度は、西郷の生き方とも通じる。これは、菊池一族を指導した永平六代目大智禅師の禅学を修めた

ことが家風となり、歴代の一族に引き継がれて、佛道に外れぬ政道を営んできたと言えるのではなからうか。それは、薩摩に移動した西郷一族にも受け継がれているのではないか。

十三代武重公の死、最も隆盛を誇った十五代武光公の死により、菊池氏は次第に勢いを衰えさせ、二十四代で血脈がほぼ途絶えることとなった。以後、下克上が進み、菊池氏の家督は阿蘇氏や大友氏のものとなり、遺領も老中などから奪われることとなり、二十六代義武公を最後に菊池家は断絶となった。このような状況の中、西郷家は肥後からの脱出を決意したものであったらうか。

五、結語・大智禪師と鳳儀山聖護寺

写真3は、菊池氏十二代と十三代が篤く信奉した鳳儀山聖護寺の法堂（本堂）である。

聖護寺は、菊池氏十三代武重公が、一三三八

年に開基された曹洞宗の禅寺である。開山は、永平道元禪師より数えて六代目の大智禪師。この方は、肥後の国宇土郡の生まれ。幼少より才気煥発。七歳にして自ら出家を希望し、長じては、宗門の長老までが畏敬するまでになった。二十六歳で元の国に渡り、様々な苦難の後帰国。晩年を加賀の祇陀寺で閑居されていた折、十二代武時公に懇願され、一三二九年、肥後に帰られ廣福寺を起こされた。更なる深山を望まれた禪師に、一三三八年、十



写真3 鳳儀山聖護寺法堂

三代武重公の釈迦山の寄進により、鳳儀山聖護寺が建立された。禅師の指導は峻烈を極め、現在も、菊池氏を教化された時の「大智仮名法語」「十二時法語」（じゅうにとときほうご）（註）が残っており、現在の禅僧たちの矚目するところとなっているようだ。

この僧堂は、自家発電装置のみで、十年前（2008年）までは電気もガスも来ておらず、里からここまでの道は、現在でも車一台がようやく通行できるほどの細いでこぼこの一本道であり、左に切り立つ崖が迫り、右に深い崖が落ちるといふ、まことに稀有な環境にある。車同士が出合わせればどちらかがバツクせねばならない。林道の始点から車で約15分、徒歩で約30分というこの環境は、今から680年もの昔、開山の明智禅師がより山奥をと選ばれた結果であるが、武重公の時代（1330年～1340年代）には、菊

池氏一門の諸侯が、現在より更に下の麓から、道なき道を踏み、川を渡って伺候参禅し、仏祖の正法、君臣の大義を拝聴され、以後二十四代に渡って続く純忠精神の源となった（資料②）。その後、一三五八年に禅師が下山されてから護持する者がなく廃寺となり、約六百年の間、雑木が繁茂するままになっていた。

昭和十一年（1936年）、長崎市の皓台寺住職であった村上素道老師が、専門僧堂の住職の職をなげうって単身この地に入られた。ここから再興が始まるのであるが、弟子の鈴木素田老師、更に新居浜市の瑞應寺住職であった檜崎一光老師と引き継がれ、ようやく、平成二年（1991年）伽藍の体裁を整え落慶した。自然のままの不便な道場こそが、道元禅師、大智禅師の唱道する修行の場にふさわしいとして、米・豪・英・仏・独・南アメリカ諸国などからの出家僧（尼僧も）を受

けられる国際禅道場となっていた十八年間、電気・ガスの近代的利器を使わない、古と自然を尊ぶ修行が展開された。修行僧達は帰国後、それぞれの国で禅の指導的役割を果たされていくのである。

このような一種特別の歴史を持つ聖護寺と、西郷隆盛の祖先であろう菊池氏の歩みを振り返ることで、西郷隆盛の人となりについて、説明がつくように思えるのである。今は、管見を述べるに留める。

了
(エッセイスト)

*この小文を書くにあたって、聖護寺護持会会長の宮本雄一様に資料の提供を頂く等、大変お世話になりました。記してお礼を申し上げます。

【資料・註】

資料①：『肥後の菊池氏』植田均著 歴史図書

社 昭和五四年刊

資料②：「聖護寺今昔(一)」国際禅道場 鳳儀山

聖護寺護持会紙「鳳山」所収

聖護寺護持会会長 宮本雄一 筆

資料③：『誰も書かなかった西郷隆盛の謎』

徳永和喜 鹿児島市立西郷南洲顕彰

館館長著 二〇一七年九月十五日

株式会社 KADOKAWA

資料④：『西郷隆盛論』堤克彦著 二〇一七年

熊本新書② 熊本出版文化会館版

註：「十二時法語」(じゅうにときはうご)

菊池一族に対して、二十四時間切れ目なしの修行のあり方を、時間を追った具体的な実践の形で説いたもの。